

巻 頭 言

ヤスパーズ哲学における良心の問題

ヤスパーズは良心を絶対意識の根源からの運動としてとらえる。それはソクラテスの無智の智、キルケゴールの不安の概念と通底する。それらは人間の有限性の自覚において結びつく。ここに実存的自由の問題が生じる。

実存の自由は、根源的には、善悪の選択という無制約的自由である。ヤスパーズは、善悪の区別に関して、二つの良心の規準を設定する。つまり共時的にはカントの定言命法の様式が、通時的にはニーチェの永遠回帰の様式が採用される。しかしいずれも一応の形式であるにすぎないのであって、良心の内実を成すのは愛と信である。

そこで良心は、そのつどの限界状況において、決断をせまる。「本来的な良心の応答としての実存的決意は、あらゆる犠牲をはらっての自己選択において無制約的に選ぶのである。」さらにヤスパーズは、良心がいかなる外的権威や固定した法則にも満足せず、慣習・制度・社会等の客体的なものはむしろ良心を麻痺させてしまう、とさえ考える。ただし、ヤスパーズは客体的なものをまったく無視するのではなくそれを絶対視することを拒否する、と解すべきであろう。ヤスパーズが同時に理性を重視することは、それを裏づける。要するに、良心は自己と他己との実存的交わりにおいてのみ開かれるのである。

ところで、ヤスパーズの良心論を他の良心論に対してきわだた

せる最も重要な所論は、良心の声と神の声との関係である。ヤスパーズは「良心の声は神の声ではない」と明言している。彼にとって、両者が同一視されるならば、人間から自由と責任の能力がうばわれ、実存と実存との事実上の交わりはなくなり、良心そのものと神性とが失われてしまうのである。良心は歴史的には人間の良心であり、良心は良心に対立するのであって、「一つの普遍的良心は存在しない」のである。だから歴史的な宗教的権威が個人の良心に反して強制されることは許されない。過去から現在にいたるまでのあらゆる宗教戦争・紛争さらにはイデオロギー戦争・紛争は、この視座から克服される必要があったし、これからも必要とされるであろう。

ルター、カルヴァン等にとって、良心は「神のかつ経験的な感覚 (sensus divini et empirii)」であったが、神のでありうるにせよ同時に経験的でもある人間の良心は誤りうるものが、十全に覚知されねばなるまい。

それにもかかわらず、神の声ではない人間の良心は、人間を「隣人との無制限な交わりにもたらすことができる」のであり、そのためには「愛しながらの戦い」とか「戦いながらの交わり」が要求されるのである。

なお、神の声ではない人間の良心の声は、善悪の選択にかかわる自由と責任という、そのつどの限界状況「いま・ここ」において聴かれるのであって、ヤスパーズの実存理性の哲学も哲学的信仰も、このような良心の働きを通してこそ、現実の地盤の上に具体的に展開されうるであろう。

(小林靖昌)